2024年9月８日 聖霊降臨節 第17主日礼拝メッセージ

「『従う』ということ」　　水谷憲牧師

聖書 ペトロの手紙Ⅰ ２章 11－25節

本日ご一緒にお読みした聖書は、新約聖書の「ペトロの手紙Ⅰ」です。この手紙は、実際にイエス・キリストの使徒であるシモン・ペトロによって書かれた手紙ではなく、キリストの使徒として影響力のあるペトロの名前を借りて、別の誰かによって書かれたものであろうと、その文章の書き方や内容からみて考えられています。そしてこの手紙は、周囲の人々、つまりこの時代にはキリスト教はまだまだ新興宗教、少数者であって、周りにいる大多数の人々すなわち異教徒たちからは、さまざまな迫害を受けていたわけで、そのような迫害の嵐の中にある仲間たちを励まし、慰めるために書かれたもののようであります。

「神様は豊かな憐れみにより、私たちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださった。あなた方は、終わりの時の救いを受けるために、神によって守られている」（2：3－5）。「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれないけれども、あなた方の信仰は、その試練によって本物と証明され、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのだ」（1：6－7）。「だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、神様に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい」（1：13－15）。「悪意、偽り、偽善、ねたみ、悪口をみな捨て去って、生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい」（2：1－2）。著者は読者にそう言って励ましているわけです。

そして今回の箇所に続きます。「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」（2：11－12）。私たちは、神様によってつくられ、命の息を吹き込まれ、またいつの日か神様に招かれて神様の御もとへと召されてゆく身であります。

そのような意味においては、私たちにとってこの世は仮住まい、私たちは旅人だと言えます。非常に詩的な表現だなあと思いますが、そのような私たちなればこそ、私たちは自らの魂、すなわち自分自身に闘いを挑んでくる肉の欲を避けるべきだ、と言うんです。

この「肉の欲」というものについて、「ガラテヤの信徒への手紙」、これはパウロによって書かれた手紙ですが、この手紙には、肉の欲に負けた先にある様々な行いが、例として羅列してあります。5：19以下です。「肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません」。一般的に「肉の業」とかいうと「姦淫、わいせつ、好色」といった性的な罪をイメージするわけですが、ここではもっと広い範囲の、肉体的な罪以上のものを指しているわけです。ある学者は次のように言っています。「新約聖書において、肉という言葉は人間の肉体的身体的要素以上のものを意味している。それは神から離れた人間の本質を表している。それは、贖われていない、生まれかわっていない人間の本性、キリスト不在の人間の本性を意味しているのである」。そんな「肉の業」に私たちを誘いこもうと闘いを挑んでくる「肉の欲」を避け、異教徒の間で立派に生活しなさい、とこの手紙の著者は訴えているわけです。

「そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」。当時のキリスト者たちは世間の人々から悪人呼ばわりされていたということがわかります。それは今の私たちからすると、とるに足らない、しょーもないこと、聖餐式の際の「これは私の体である」「これは多くの人のために流される私の血、契約の血である」といった言葉から「あいつらは子どもを殺して食べているのだ」と誤解されたりとかいうことでしたが、そういう誤解からくる誹謗中傷、事実に基づかない非難という迫害の中にあっても、皆が感心するような生活、そんな非難や中傷なんて嘘だと周囲に証明するようなすばらしい生活を続けていれば、世間の人々もいつか神様を信じる日が来るよ、と。それは今の私たちも謙虚に聞くべき言葉なのかもしれません。私たちは、自分が意識しているかしていないかにかかわらず、また望んでいるかいないかにかかわらず、クリスチャンである以上、クリスチャンであるということを周囲の人々が知っている以上、キリスト教の生きた広告塔であるわけです。私たち

の生活の中でのなす行いや語る言葉によって、キリスト教があこがれの対象、「こんな人に私もなれたら」という対象になるか、「キリスト教徒ってこんな人たちなん？」「キリスト教なんてクソだな」といった失望や軽蔑の対象になるかに分かれてゆくのでしょう。私たちも襟を正して、背筋を伸ばして、気をつけないといけないことを思わされます。

さて、そしてその次、13節以降からが、その「立派な生活」「立派な行い」の具体的な一つの例なんですが、ここからは非常に理解が難しいところでもあります。「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが、統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい」「皇帝を敬いなさい」「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい。善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」とか、ええっ、と驚くようなことが言われているわけですが、本当にそうするべきなんでしょうか。人間が立てた制度に従って、例えば最近ニュースでも兵庫県知事の不適切な言動が話題になっていますが、「俺は知事だぞ！」って言われたら、「ははー」ってひれ伏して、カニやワインなどの地域の特産品を「くれ」って言われたら「どうぞどうぞ」って渡すような、そんな権力者のおねだりも、甘んじて受けないといけないのでしょうか。

決してそういうわけではないんですね。ある聖書学者は、この箇所について次のようにまとめています。かつて、新約聖書時代の国家と私たちの現在知る国家との間には、根本的な相違がある。新約聖書時代にあっては、国家は独裁国家であった。支配者は絶対的な支配者であり、市民の唯一の義務は国家に絶対的な服従をなし、国家の命ずるままに税を納めることだったのだと。「ローマの信徒への手紙」13：6－7には「あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい」とパウロが書いています。

私たちは、誰も彼もが好き勝手に生きていたら、私たちの生活とか社会はめちゃくちゃになってしまいますから、それをある程度ね、秩序を保たせるためには、国家であったり制度というものがどこかで必要にはなってくるだろうと思うわけ。ですが、今私たちは独裁国家にではなく、民主主義下にいます。民主主義国家における市民の義務は、服従して支配を受けるのみならず、統治する責任も必ず分かち合わ

ねばならない。民主主義国家における私たちの義務は、服従ではなく共働（ともにはたらく）なのだ。キリスト者が国家に対する義務を果たそうとするならば、国の政治に参加しなければならないのだと。そういう限定的な意味において、私たちは制度に従い、あるいは皇帝・為政者に従うべきなんだということなんですが、時には人間よりも神の声に従わなければならない時があることも、「使徒言行録」の中でペトロやヨハネなど使徒たちが証ししているわけです。従うと言っても、ただ盲目的に考えもなしに従うのではなく、神様の御心に従った結果によって、私たちは能動的に従っていきたいものだと思います。

そして一番悩ましい、召使と主人の関係についてですが、色々考えてもやっぱりわからない。これをどう考えたいいのか。でもやはり、これも私たちは現代の状況に合わせてこの御言葉を捉え直していかないといけない、考えていかないといけないんだろうなっていうことを思わされています。聖書の時代から長い時を経て、世界中のほとんどの国で「奴隷制度」はなくなりました。一人の人間は誰かが財産のように所有できるものではないことが共通の認識になっています。もちろん現実には、奴隷のようにモノのように扱われている人がいて、扱っている者が、今も世界のどこかにいることも思います。しかしそれは今の世界、確実に違法です。当時は合法だったのに、なぜ現在は違法になったのか。それはやはりすべてのものの命を大切に思っておられる神様の御心が、もともとそういうことだったからです。それは、当時の強固な奴隷制度に反抗してさらにひどい目に合う人を出さないための、召使たちへの勧めでもあったのかと思われますが、その中で苦しみを受けた人々、命を奪われた人々、そのような人々の苦難の歴史の中で、少しずつ時代は変わり、今に至った。まさに当時の召し使いや奴隷の身分であった人々の、まさにキリストと同じ、悲しい犠牲の積み重ねによって、私たちの世界は、御心のままの正常な世界へと、少しずつ変えられてきたことを思います。

私たちの世界はまだ完全ではない。でも、少しずつ、少しずつだけれども、御心の方向へ世界を私たち人間は変えてゆけるのだということを、私たちはこの「召使たちへの勧め」を読むたびに信じ、心新たに我が生活を振り返って、私たちそれぞれがキリスト教の広告塔であるという自覚を持って、御心に従って生活してゆきたいと思います。